昭和五十七年九月二十六日　郷土資料

第一一九回

史跡めぐり資料

（日光・今市地区）

越谷市郷土研究会
理事　山崎善司

日　第一一九回史跡めぐり案内（日光・今市地区）

日時　九月二十六日（日）　午前8時

集合　越谷駅前集合　午前8時21分発（羽生行準急）

行先　越谷駅　ー春日部駅　乗替快速急行　ー下今市下車

コース　今市市立杉並木資料館　ー杉並木　ー追分地蔵尊　ー東武バス　ー西参道下車　ー日光奉行所跡　ー東武鉄道観光センター　ー　ー　昼食　宝物館　ー五重塔　ー東照宮参観　ー表参道　ー勝道上人銅像　ー御旅所（山王社）　ー深砂大王社・星ソ宮　ー太郎杉　ー神橋　ー杉並木寄進碑　ー板垣退助銅像　ー天海僧正銅像　ー鉢石宿　ー鉢石　ー　ー　東武日光駅

帰路　東武日光駅　ー春日部駅　乗替　ー　ー　ー　解散

案内者　山崎善司　理事

会費　一金、参千五百円也、　交通費・見学費・資料費他）
但し、昼食は各自弁の事（食堂利用）

越谷市越ヶ谷四ー一ー一四
越谷市立図書館内
越谷市郷土研究会

芭蕉の日光詣

あらたふと　青葉若葉の　日の光

野を横に　馬牽むけよ　ほととぎす

うら見せて　涼しき滝の　心哉

時鳥　うらみの滝の　うら表

暫時は　滝に籠るや　夏の初

（日）

剃捨て　黒髪山に　衣更

今市市

今市市は、人口四万八千人、宇都宮市の北西に続く市で、日光国立公園の表玄関口となつている。北東から北は塩谷郡塩谷・藤原の両町と栗山村、西は日光市、南西は鹿沼市に各々接している。昭和二十九年三月、旧今市町を中心に豊岡・落合の両村が合併して市制を施行、今市市となり、同年十一月藤井村の北部と大沢村を編入して今日の市域が確定した。

市中心市街は、大谷川扇状地の扇頂部、大谷川が山間部から平野へ出るあたりに形成される。元和年間（一六一五～二四）日光東照宮の造営が成り、次いで設置された日光街道（現国道一一九号線）と例幣使街道、会津西街道（現国道一二一号線）の三街道の合流点に出来た宿場町が、その都市的起源とされる。以後近世を通じて東照宮参詣の諸侯・士庶の往来で賑わい、日光参拝の諸侯は・こゝで宿出をして清めを受ける慣しになつていた。又日光地方や鬼怒川上流域を勢力圏に持つ、市場町としても栄えた。今も街道沿いに続く軒の低い家並みや、露地裏等に、往時の面影を残している。

昔の今市

原始　縄文時代は、数千年続いた長い時代で、まだ栽培技術を知らなかつたが、我が国で始めて土器を使つた時代である。この時代は、土器を基準に草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と区分されている。今市には早期から後期まで四十三ケ所の遺跡があり、その内、三十二ケ所は中期の土器を出土している遺跡である。

古代　弥生時代は、水田耕作を開始した時代であり、この時代は前期・中期・後期と区分されている。この文化は西日本に発生し、次第に東日本に伝わつて来た。栃木県に伝わつたのは、弥生時代中期である。本市の上山遺跡からは、本県で最も古い、中期の住居跡が発見されている。今市市には、中期の遺跡が八遺跡あり、後期の遺跡は発見されていない。

今市市には、古墳時代から平安時代までの歴史的遺物ははとんどない。然しこの時代に使用された土師器は、本市の南端にあたる、下中野遺跡や八岡遺跡から出土している。今市の台地上に住居を構えた人々は、この時代にはその数も少なかつたのであろうか。県下の各地には、古墳やその時代の遺跡等が多数あり、栃木県全体としても歴史的資料の豊富な県であるので、未発見の遺跡が、埋もれているのでは無いだろうか。

中世　日光山の中世記録には、明神郷、塩野宮郷、小林郷、矢野口郷などの名が見える。この時期の今市の村は、扇状地扇端部に散らばる幾つかの点であつた。集落は、平地に進出したが、沢沿いにわづかに開けた水田と家々の小さな規模のものであつ

たろう。農民達は、土地の土豪によつて支配されていたが、次第にまとめられて、江戸時代の村に発展する。

板碑　板碑は、死者の供養に建てたものである。今市の板碑は、今から六百五十年程前のもので、嘉暦四年（一三二九）記銘一尊種子板碑、秩父より運んで来たと推定される。そこには、強い信仰心と財力者の存在した事が窺われる。板碑の発見地は標高三百米附近の湧水地点で、水田と果樹形成が、その附近に展開されていた事が想像出来る。

近世　元和三年（一六一七）徳川家康の神柩が久能山（静岡県）から日光山に遷座され、江戸幕府の聖地日光が誕生した事により、この今市地域は大きく変化した。日光へ向う日光街道、例幣使街道、会津西街道が整備されると共に、各街道には宿場が設けられた。幕府は日光山を維持する為、この道場及び隣辺の村々を「日光領」としたのである。これが今市地域の近世の幕明けである。"日光領"の支配は、十七世紀から十八世紀後半までは、天海僧正と縁りのあつた山口氏が代々日光目代として統治に当り、それ以後幕末までは、日光奉行が直接支配に当つていた。

江戸時代後半になると、飢饉、過重な賦課役、貨幣経済の浸透等に依り、荒地の増加と人口の減少という大きな社会問題が生じていた。

将軍の日光社参　将軍が日光東照宮に参詣する事を日光社参といつたが、その多くは東照宮の例大祭（四月十七日）の日に参詣した。東照宮か日光に領地した元和三年（一六一七）四月、二代将軍秀忠が参詣したのに始まり、以後幕末まで計十九回行われた。この社参の宿泊所は行き帰り共、岩槻・古河・宇都宮で、三泊四日の行程であつたが、帰路は宇都宮を通らず、千住と岩槻に泊まり、二泊の場合もあつた。社参の行列は、我が国交通史上特筆すべき壮観を呈し、最後の社参となつた天保十四年（一八四三）の時は、供奉十四～五万人にも余る大行列であつたといわれる。これに要した幕府の費用も莫大なものであつた。一方、街道筋周辺の村々には、人馬調達の為の大かかりな助郷役が命ぜられ、特に之の時期は出穂時期とも重なり、村々の負担は相当なものであつた。

例幣使参向　日光例幣使は、日光東照宮に幣帛（御供物）を奉納する為、毎年朝廷から差遣される使者（勅使）をいう、東照宮の造営が成つた元和三年四月から、度々勅使が派遣されたが、正保二年（一六四五）十一月、寛永寺宮下の勅使が参向した後は、五十人程の行列を組んで四月一日京都を出発する。そして、東海道を草津より中仙道に入り、木曽路を経え、倉加野（高崎市）からは例幣使街道を通り四月十五日、日光山に入るのが慣例であつた。

杉並木

杉並木　今市は良く、「街道の町」といわれる。江戸時代を通じて、人々の通行や物資の輸送にかゝわつて発展して来たという歴史的事実を考えれば、たしかに「街道の町」という表現は的を射ていよう。

然し、「街道の町」という表現は、元和三年家康の日光廟（東照宮）が造営されて、武家や公家の参詣の為の日光街道とその宿場が整備されて以後の事である。つまり今市の町は、幕府の街道整備に基ついて起り、発展して来た町と言えるのである。

その後、人と物資の往来に支えられて、今市の町は大いに発展する訳であるが、この人と物資の往来が町を繁栄させ、人々の生活を潤した

その一方で、日光領々内に住む人々の生活を苦しめたのも、助郷役の負担に代表されるこの「往来」であつた事を見逃す事が出来ない。それは、幕府の聖地日光を背後に持ち、日光領という特殊な地域に立地する今市の特徴でもあるのである。

杉並木の成立

今市市を代表するものに杉並木がある。松平正綱（川越城）に依つて寛永二年（一六二五）頃から二十年余の歳月を掛て植栽されて今日の景観を見る日光杉並木は、その植栽時期を今市の町の整備の時期と同じくしている。以来三百五十年今市の町の発展と共に、この地域の人々の喜びと悲しみをじつと見詰めて来た、と言えるのである。

国の「特別史跡」「特別天然記念物」という、二重指定を受けた貴重な「国の宝」と言うばかりでなく、江戸時代の街道の面影を良く残している日光杉並木街道は、今市の町の起こりと発展を考える上で、密接な関係にある「交通と運輸」という面からも、貴重な資料なのである。

杉並木寄進碑

日光杉並木の由来を記した石碑である。並木の起点となる神橋畔及び各街道の並木の切れる、今市市山口（日光街道）、同小倉（例幣使街道）、同大桑（会津西街道）の四ヶ所に建つている。神橋畔の碑は、高サ二、八七米である。それぞれの碑文はやゝ異なるが、日光杉並木が三百余年前に、松平正綱によつて植栽寄進された事が記されている。

松平正綱の並木寄進

松平正綱は、天正四年（一五七六）遠江国（静岡県）で大河内金兵衛秀綱の二男として生まれた。幼少にして徳川家康の命に依り、長沢（愛知県）の松平家の養子となる。一七歳の時より家康の側近として仕えた。幕府の経理を預る勘定奉行として、身分は四千七百石の旗本であつた。寛永二年（一六二五）七月、三代将軍家光、多年の功を認められ、二万二千石となり、大名の列に加えられた。正綱は家康に対する報恩の念篤く、東照宮へ詣でる為の日光街道及び、山内に杉の植栽を志し、二十年余を掛けてこの事業を完了し、之を東照宮に寄進した。

今、杉並木は延々として連なり、神橋畔等四ヶ所にある寄進碑がその事跡を伝えている。

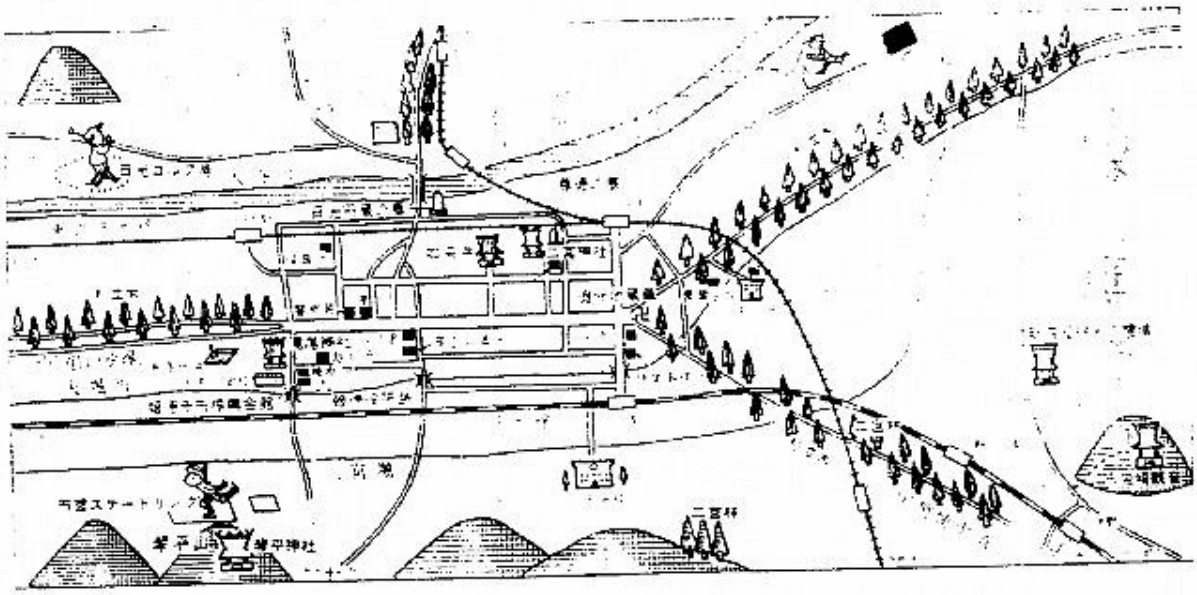
追分地蔵尊

日光街道と例幣使街道の分れ道に祠られている。ここから両街道に杉並木が続き、交通の激しい所である。地蔵尊の前、左右に立つ杉の木に掛られた"追分地蔵"のネオンは、ドライバーへの心遣いであろう。

高サ二・九米、蓮台の上の丸彫りの石仏である。年代は不詳だが、その手印は特殊なものだと言われる。八代将軍吉宗公日光参詣の記録に、ここに有る事が記されている。

一説には、弘法大師が、弘仁十一年（八二〇）国家安泰を祈願して、始め日光含満ケ淵に建てられたもので、洪水に流されて大谷川の砂に埋もれていたのを、通りがかりの石工が見付けたと言う、大きな石と思い、鏨を打込むと、忽ち辺りが瑞雲が棚引き、石の傷跡から血がにじみ出たと伝えている。霊験あらたかな地蔵尊として信仰されている。地蔵尊の周りには、お礼の印か、願懸か、赤いよだれ掛を付けた小さなお地蔵さんが沢山並んでいる。「二十三夜祭り」毎月二十三日が縁日である。

今市市内観光案内図

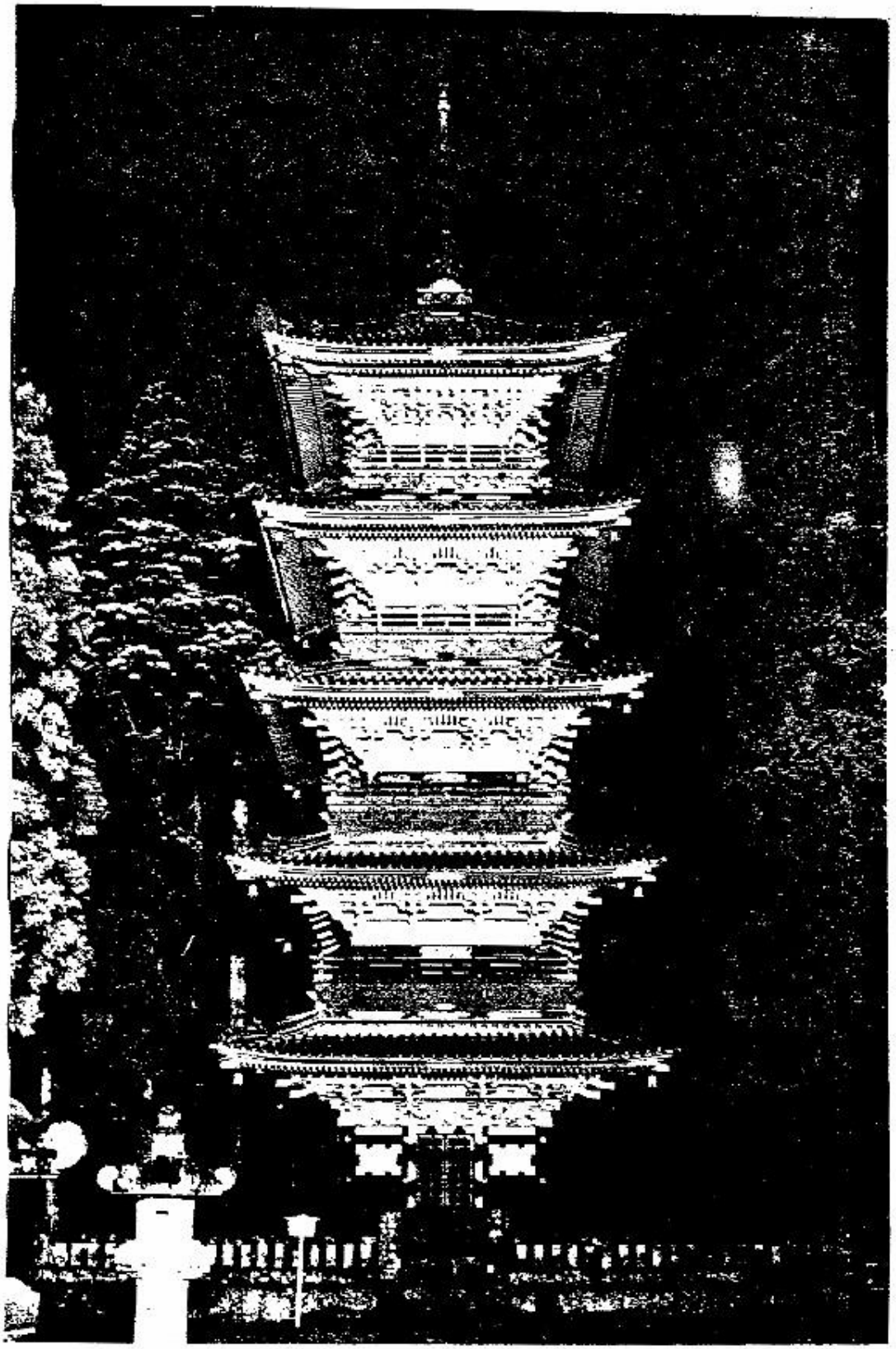


日光山道中図絵（日光東照宮蔵）

この図帖は、折本仕立の九帖からなり、江戸から日光までを極彩色で、並木の続く道中景観や宿場、また東照宮・大猷院廟をはじめ百余の宿坊が立ち並ぶ日光山内の景観等を克明に描いている。天保14年(1843)、12代将軍家慶の社参の際に使用されたものと推定されている。

日光杉並木街道

東照宮参拝のためにひらかれた日光街道の杉並木を植栽した区間延長37粁は大日光の表玄関だが、近世に発達した典型的な街道として、特別史蹟・特別天然記念物に指定されている。（写真は今市市十石坂附近）



日光東照宮五重塔（酒井忠勝奉納忠近再建）

日光市

人口二万五千五百人、日光国立公園の中核をなす観光都市。市域の東部は今市市、南は鹿沼市と上都賀郡足尾町、西は群馬県、北は塩谷郡栗山村に接している。明治二十二年二月に小来川村を編入して市制を施行した。栃木県は、群馬県と共に毛の国と言い、渡良瀬川を境にして群馬が上野毛国、栃木が下野毛国と呼ばれていた。古い時代には下野毛国の国府は、下都賀郡に置かれ、国府や国分寺、薬師寺等が建てられていた。この西北部に日光市がある。

日光の開発の歴史は古く、日光山が始めて史実に現はれるのは、奈良時代、天平神護年間（七六五～六七）で、今から千二百年程前に遡上る事が出来る。

当時、山岳宗教が盛んで、高山を開いて霊場とした。日本古来の神祇宗信仰に仏教が結び付いて、仏が神の姿を借て現われる、所謂本地垂迹説にもとづく信仰で、日光と同じ頃、高野山、比叡山等が相次いで開山されている。

日光山は、山岳信仰開山以前より、農業の守護神のように尊仰されていたらしい、男体山を男神、女峰山を女神、太郎山をその長男とする古来の信仰である

下野国芳賀郡の人、勝道上人が、日光を開く為、十人の弟子を連れて古峰ヶ原を経え、大谷川を渡つて川の辺りに草庵を営んだ、のは、天平神護二年と言う。こゝを足場に男体山登頂の準備をして、神護景雲元年（七六八）登頂したが失敗、三度目に、天応二年（七八二）山頂を極める事に成功した。

この時勝道上人は、男体山上で、大己貴命（二荒山・父）、田心姫命（女峰山・母）、味鋤高彦根命（太郎山・長男）の三地主神、つまり大国主命とその妻子達に逢い、開山の許しを得てそ　のかわり三神を祭る社を建てる事を誓つた。こうして建てられたのが、二荒山神社・中宮祠である。

さらに勝道は、三神の本地仏である、千手観音・阿弥陀如来・馬頭観音を祠つて、草庵の場所に四本龍寺、中禅寺湖畔に本宮神宮寺（中禅寺）を創建した。輪王寺の前身である。

平安時代になると、弘仁十一年（八二〇）、弘法大師空海が入山して寂光寺・滝尾寺等を創建し、二荒の山号を「日光」と改めた。嘉祥元年（八四八）四月には、慈覚大師円仁が勅命に依り来山して三仏堂・常行堂等を建てゝいる。又嘉祥三年（八五〇）今の鐘楼の所に新宮大権現が造営され、滝尾権現と、四本龍寺の近くにある本宮権現とを合せて、"日光三社権現"と呼ばれる。

平安末期の安元年間（一一七五～七七）、隆宣・祥露の座主争いから、在来の諸堂塔が兵火に逢い焼失。一時荒廃したが、中世に入ると、鎌倉幕府の支持、熊野修験道の移入、皇族座主を迎える等の事あつて、山内の神社・仏閣が再興された。

室町時代には、山や谷に五百を越える堂坊があつたといゝ、これ等寺坊の持つ領地は、十八万石に及んだと伝えられる。

戦国期には、この実力を背景に、日光山も比叡山や高野山などと同じ様に法力と兵力を併有し、北関東に一大勢力を誇つたが、天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉の小田原攻めの時、小田原方に味方して、壬生氏に従つたと言う理由で、領地の大部分を没収され、衰微した。慶長末期には、山内に大坊九ヶ寺を数えるばかりであつた

徳川時代になり、元和二年（一六一六）、第六十三世慈眼大師天海の尽力に依り、再び隆盛になり、徳川家康の廟所、東照宮が造営され、寛永年間（一六二四～四四）徳川三代将軍家光は、大改築を行い、今に見る豪華絢爛たる東照宮の諸社殿は家光の造営したものである。

以後、日光山の中心は、輪王寺・二荒山神社から、東照宮に移り修験道は大きく後退した。然し、山内の回峰行は、儀式的になつたが、その後も続けられている。

東照宮

造替工事は寛永11年(1634)11月に始められ、家康の21周忌にあたる寛永13年4月におわった。造営奉行は秋元泰朝と松平正綱、建築の総指揮には幕府の大工棟梁の甲良宗広があたった。甲良宗広は2代将軍秀忠の台徳院廟の造営も担当した棟梁であり、また彩色には狩野探幽、鋳金には椎名兵庫、その他金工・仏師・漆工・石工なども当時一流の工人が選ばれている。

その総工費は、賦役人夫の費用を別にして金56万8,000両、銀100貫目、米1,000石と記録されており、今のお金に直すとざっと160億円。使用木材もメ尺、すなわち約30cm角、長さ3.6mのものを14万7,012本用いたといわれるが、これを1本づつ縦に並べると約520kmになり、だいたい東京から京都までの距離に相当する。また社殿にはりこまれた金箔は248万9,900枚ということで、当時の金箔は3寸2分4方であるから、これを一枚並びに敷きつめると7,082坪3分、約2万3,372㎡の広さになる。

ともかく莫大な工費と労力とを注ぎ込んだ工事で、元和の創建当初の規模は一変し、この時に完成した建物が、今の東照宮の主要な結構をなしている。また造替前の本殿・唐門・拝殿などは、群馬県新田郡尾島町世良田に移築され、現存している。

元禄年間(1688～1704)にも、総奉行井伊直興、御大工頭鈴木長頼、御普請手伝松平綱村(仙台藩主)の指揮により、諸社殿の修理がおこなわれた。

現存する五重塔や陽明門、三神庫・拝殿・石ノ間・本殿など、諸社殿の大部分が国宝あるいは国の重要文化財に指定されている。

建物の各所に金箔がおかれ、原色がほどこされてあるなど、あまりに華やかであるため、「装飾のかたまり」とか「無趣味な成り上り趣味」などともいわれるが、一方では「装飾美術、工芸美術として考えれば……世界の珍宝である」といった評価もある。いずれにしても人工と自然の調和、社殿の配置、さらに細部の装飾や彫刻群などには、目を見はらせるものがある。

東照宮 日光山内，日光駅からバス，神橋または表参道入口下車。

徳川家康の霊を祀る神社で、江戸時代初期、日光山第53代座主慈眼大師天海の尽力により建てられたもの。

家康は元和2年(1616)4月17日、75歳で駿府城(静岡県)で死去し、遺言に基づいて久能山で神葬が行なわれ、神明造りの神社の建立が計画された。これは吉田流神道にもとづくものであったが、天海の主張する天台宗系(山王一実神道)の祭祀形式に変更され、神号は東照大権現の勅許を得、日光廟の造営がおこなわれることになった。

なお天海と家康が知り合ったのは、「日本仏教史綱」によると慶長12年(1607)のころらしい。家康は天海の識見を高く評価し、比叡山の探題奉行に任じた。翌13年天海は招かれて駿府に入り、同16年家康に血脈を授けて僧正になった。慶長18年家康の命で日光山に入り、その復興に努めている。天海の出身は不明だが、没年は寛永20年(1643)10月1日で、このとき108歳とも、120歳であったともいう。

天海の進言により家康の遺骨を久能山から日光に移すことが決まると、2代将軍秀忠は本多正純、藤堂高虎を奉行として廟舎の建築にあたらせた。その着手は元和2年(1616)10月26日で、翌年の3月には本社・本地堂・霊廟などの社殿が完成し、4月4日に霊柩が久能山から移され、同月17日に鎮座の儀式がおこなわれた。これが東照宮の創始とされる。

その後十数回造替・修理の手が加えられているが、その中最も大規模なものが、3代将軍家光によっておこなわれた寛永の造替工事である。

家光は、日光山東照宮の規模があまりにも小さいのに不満をもち、造りかえたというのがその理由とされる。しかしこれは表向きのもので、その根底には諸大名の財力を消費させ、戦力を弱めさせようという考えと、戦後の殺伐とした気風を他方面に向けさせようとする考えがあったともいわれる。

▼東照宮社殿配置図

三神庫・神厩・御雪穢

三神庫・神厩 重文　表門をくぐるとすぐ見える高床、校倉造りの朱塗りの建物で、一番手前のが下神庫、中はどのが中神庫、左側のが上神庫。下・中神庫には千人武者行列に用いられる 1,200人分の装束が収められてあり、上神庫には舞楽用の装束が入っている。

上神庫の南側切妻にある象の彫刻は、「眠り猫」「三猿」とともに日光3彫刻の一つとされるもの。金箔押しの壁を背景に太祇東をはさんで、左に白色の象、右に灰色の象が配されている。狩野探幽の下絵といわれるが、象らしくない象で、太ったイノシシみたいだが、象を見たことのない江戸時代の彫刻家が、想像で彫ったものらしい。

中神庫の南側、参道を挟んであるのが神厩で、東照宮境内唯一の素木造りの建物。この左右の長押には、参道側に5面、右側に3面、計8面のそれぞれ違った構図による猿の彫刻が施されているが、うち左から2番目の3匹が、「三猿」として よく知られている。目をおさえているもの、口をおさえているもの、耳をふさいでいるものが並んでいて、「見ざる、言わざる、聞かざる」の意を伝えているといい、これが東照宮の根本理念だという。そんなむずかしい話でも、今では日光駅前や市内で、眠り猫とともにみやげものとして店先きにたくさん並んでいる。

また神庫の東裏に西浄があるが、これは「御雪穢」と説明されてあるように便所である。東司とも呼ばれ、内部は石畳の土間の両側に8個の大便所が並び、一方の壁に形式的に取り入れただけの棚掛がある。実際には使われず、思想上のもの。

一ノ鳥居・五重塔

一ノ鳥居 重文　御旅所をすぎて長坂を登りきり、陽道上人の銅像を右手に見て、輪王寺門跡の南側を通って西に行ったところ。ここから北にのびるゆるい上り坂の幅の広い砂利道が東照宮の表参道で、両側は老杉におおわれ、正面に一ノ鳥居が見える。参道は先に行くほど幅をせばめるという遠近法がとられてあるため、奥行きをいっそう深めている。

鳥居は高さ9m、柱の周囲3.52m、柱の間が6.84mの石造明神鳥居で、石造りの鳥居では日本一高く大きい。柱に元和4年(1618)、福岡城主黒田長政が建立寄進した銘が刻まれてある。石材は長政の領地の筑前国志摩郡小金村から切り出したものを使用している。国指定の重要文化財。

鳥居前の石段は10段あり、人を並べると1段 100人乗るので、10段で 1,000人。鳥居をくぐったところにひらけるほぼ正方形の広場も、ちょうど 1,000人収容できるという。この千人桝形と呼ばれる城郭建築の手法を、何のためここに取り入れたのかは不明。また石段の上から2段目、ほぼ中央にある石が変わっている。"照り降り石"と呼ばれ、一枚石の中央に斜線があり、天気がくずれると半分が赤く色変わりする。乾いていると全く他の石と区別はつかない。

広場の西側に五重塔があり、正面には城郭を思わせる石垣がそびえてその中央の急な石段の上に表門がある。ともに国の重要文化財に指定されており、五重塔は、若狭藩主酒井忠勝が慶安2年(1649)に奉納したものだが、文化12年(1815)に焼失し、文政元年(1818)酒井忠近が再建した。

表門は銅瓦ぶきの八脚門で、左右に仁王像、内側の左右に金色の狛犬がおいてある。仁王像は高さが約5mあり、大仏師広音法師の作と伝えられる。この門から奥が拝観券の対象になる。

なお広場から東照宮の石垣下を西にのびる道が、二荒山神社に出る上新道で、東に入れば東照宮社務所にでる。社務所には横山大観・中村岳陵・堅山南風・荒井寛方らの描いたふすまや杉戸がある。

御仮殿

御仮殿 一ノ鳥居前から東へ入った杉木立の中にある。本殿修理のときの遷宮のために用意されたもので、寛永造替のときに建てられた。

建物は透塀によって囲まれているが、本社では側面からみることのできなかった権現造りの構造が手にとるようにわかる。

本殿は桁行・梁間とも3間、屋根は入母屋造り、正面の向拝3間で、本社の修営の際、ここに外遷宮といって御神体が移されてから始めて造替工事がはじめられた。内部には簡略だが、気の利いた装飾が施されてある。

本殿・相之間・拝殿・唐門・透塀・鳥居・鐘楼などが国の重要文化財に指定されている。

陽明門前広場

陽明門前広場　水盤舎のところから右に曲がり、銅鳥居をくぐると正面奥に、2段構えになった石段の上に陽明門が見える。この石段付近や最初の石段を上がったところ、陽明門の前に開ける広場には、国の指定重要文化財になっている各種灯籠・鐘楼・鼓楼などがたくさんある。

南蛮鉄灯篭

まずはじめの石段下右手にある2番目、油井の伊達正宗が寄進した南蛮鉄灯籠で、おそらくポルトガルから鉄材を輸入して建てたと伝えられている。なお東照宮境内には総数121基の各種灯籠があるが、これらの奉納された年代をみると、東照宮が日光に鎮座した元和3年銘のあるものが78基で、寛永13年の造替時には1本も奉納されていない。

石段を上りきって石柵の内側を見ると、左右に石の唐獅子がつけられている。装飾と支えをかねたものだが、縦石と同じ一枚石に彫り出され、飛び込みの形をしているところから"飛込獅子"とも呼ばれている。

鼓楼・鐘楼

陽明門を正面にほぼ同じ形の建物が左右対象に並んでいるが、向かって左が鼓楼で、右が鐘楼。両方とも唐様の建築様式で、楞厳(りょうごん)と呼ぶそ回りには銅板が張ってある。本来は山内に時を告げるため太鼓と鐘をおく建物だが、実際には用いられておらず、古い寺院形式にならって建てられたもの。

虫喰鐘

鐘楼の前、参道よりに寛永13年朝鮮から奉納された朝鮮鐘をつった鐘舎がある。鐘は直径1mほどの銅鐘で、崇禎壬午の年(1642)の銘が認められる。鐘をつる金具"竜頭"の下に穴があいていることから"虫喰鐘"とも呼ばれている。

銅製オランダ灯篭

この右手前、飛び込み獅子に近いところにある、面白い形をした銅製のスタンド式燭台は、寛永17年にオランダ商館長のカロンから将軍家光に献上されたもの。これとは反対側、鼓楼のそばの八角形の建物の中にある、30個の火ともし台をつけたシャンデリヤ形式の灯籠と、左手前にある回転式灯籠もオランダ商館からの献上品である。回転式灯籠には九つの透彫がつけられてあるが、これがぜんぶそろうまで、"逆鱗"といってよく知られている。

薬師堂

鼓楼の背後、杉木立の中にあるのが本地堂である。家康は乱世をしずめ、国を治めた名医という考えから薬師如来の生まれ変わりであるとされ、その本地仏である薬師如来が安置されているので、薬師堂とも呼ばれている。

堂内の天井に、狩野永信・安信の筆という長さ8mもの蟠竜の図が描かれ、この竜の頭の下で手を打つとフルフルという共鳴音を出すので、俗に"鳴竜"と呼ばれて日光名物の一つになっていたが、昭和36年3月に失火で焼けた。今の堂は2億8,700万円を投じて、同38年から再建にかかり42年に完成したもの。内陣天井の鳴竜の絵も堀山南風画伯の筆で、従来と同じような音響効果も施されている。建物は東照宮の管理だが、祭事と管理は輪王寺の所管になっている。手ばなしで鳴竜の音を聞くには特別拝観料が必要。

水盤舎

水盤舎(重文)　表門を入ると参道は、左手に曲がり、神庫と神厩の間を西へ進むが、そのつきあたり、上神庫のほぼ向かいにある。

元和4年(1618)4月17日、家康の2回忌に、九州佐賀藩主鍋島勝茂が奉納したもの。銅瓦ぶき、前後に大唐破風を設け、妻の虹梁下に龍彫、虹梁の上に飛竜という、水にちなんだ彫刻が施されてある。柱は主柱4本の他に、それぞれに2本ずつ副柱が付けられ計12本、いずれもみかげ石造り。

本殿の水は湧き出るように工夫されているが、この水は遠く社務所裏から水路で引かれ、境内の中を暗渠で通され、神庫裏の石垣から落下するときの水圧を利用して噴出するようになっている。

水盤舎の前には、わが国最初といわれる銅製鳥居があり、これをくぐった左手に、輪蔵(一切経蔵とも呼ばれる経蔵)がある。

経蔵

経蔵は唐様、宝形造りの宝屋に、和様のもこしを付けた2重屋根に見える建物で、内部に回転式の大書架があり、天海版の一切経7,000余巻が収められている。また長押の20個の蟇股のうち、南側の右から2番目には、弓と古い靴の彫刻がある。"弓田にくつを入れず、拳下に冠をたださず"の儒教思想の故事によるものという。

千人武者行列

毎年5月17・18日と10月17日の東照宮例大祭の行事としておこなわれる。起こりは、元和3年に東照大権現の神霊を駿河の久能山から日光に移したときの行列を、そのまま今日に再現したものだといわれる。

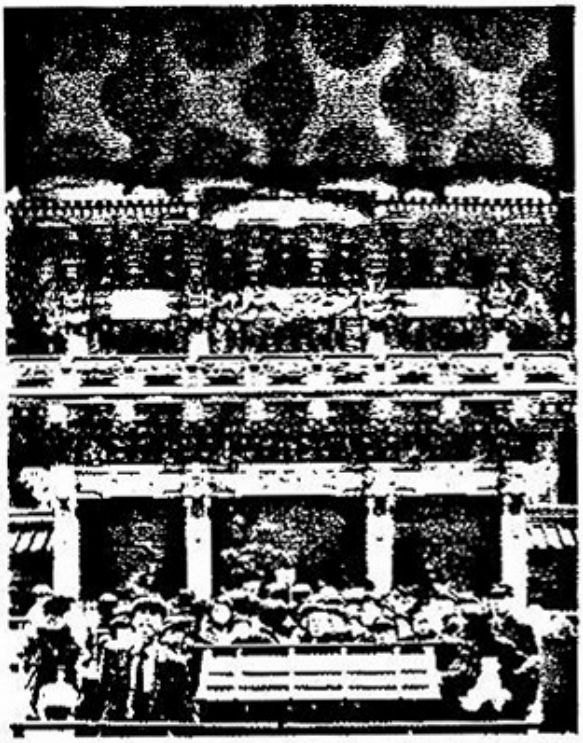
5月17日は宵宮と称され、家康・秀吉・頼朝の3基のみこしが二荒山神社に御渡する。本殿では例祭がとり行なわれ、輪王寺三仏堂では延年の舞が舞われる。

翌18日には二荒山神社から3基のみこしが、長坂東側の御旅所へ向かって行列を連ねる。この行列には乗馬の神職をはじめ鎧武者100人、弓持ち50人、槍持ち50人、鉄砲持ち50人、掛面50人のほか、獅子・八乙女・稚児など総数1,200人余が供奉する。これが俗に千人武者行列と呼ばれるもので、日光名物の一つになっている。

また境内の下新道では、小笠流の流鏑馬がおこなわれる。御旅所における行事は、三品立七十五膳と称する神饌を供え、八乙女の舞と東遊の舞楽が舞われ、祭儀が終わる。

陽明門

▼陽明門 東側



陽明門　日光を代表する建物で、とくに色彩のすばらしさは他に例をみない。門自体は間口7m、奥行4.4m、棟高11.1m、建築面積約30㎡の小ぢんまりした2層の楼門だが、全面に施されてある400を越える装飾彫刻は、朝から日の暮れるまで眺めていてもあきることがないというので、一名"日暮の門"とも呼ばれている。

屋根は4方の軒に唐破風をつけた入母屋造りで、正面の唐破風の中に元和3年後陽成天皇から賜わった"東照大権現"の額が掲げられてある。

彫刻類でまず目につくのは高欄にはめこまれた唐子、すなわち中国の子供達の彫りものだろう。獅子舞い・竹馬乗り・こまとりなどのテーマ別に、一区画で表わし、極彩色を施してある。柱の上部と肘木先端にあるおびただしい数の唐獅子の上半身像や、上層に2段・3段にかさなって彫られている竜の彫刻は、よく観察すると各々その表情や姿態が異っており、彫刻類にまったく興味をもたない人でも見あきない。

下層組物の間に施された、琴高仙人や、虎や麒麟に乗る仙人、鶴林寺などの仙人の彫刻も見事なものである。

柱は全部で12本あるが、この装飾にも特徴がある。ケヤキ材を用いており、グリという曲線文の地紋彫りに鳥獣や花の円紋を彫って、全面に胡粉が塗られている。裏側の通路左手2番目の柱だけが、グリの地紋が他の柱とは逆になっており、"魔除けの逆柱"などと呼ばれている。どうしてもさわってみたくなる感じだが、透明プラスチックで囲ってあるので眺めるだけのもの。

門の側面の羽目板は一枚板の金箔押しで、極彩色の牡丹が浮彫りされてある。天井には寛永13年狩野探幽筆の昇り竜(八方にらみの竜)、探幽の弟安信が描いた降り竜(四方にらみの竜)の絵がはめこまれてあったが、300年もの長い間手が加えられていなかったためいたみがはげしく、現在は羽石光志画伯の手で補修され、宝物館に保存されている。

色調は、東照宮の他の建物の多くに極彩色が施されてあるのに対して、陽明門は柱の部分の白、組物の黒、縁先や組物面・飾り金具の金という、白・黒・金の3色が基調になっており、彫刻群とともに特にきわだった印象を参観者に与えている。仙人や唐子の極彩色、軒裏などに描かれた唐草文の朱・緑青・群青などは、遠望するとほとんど目立たない。

なお門が竣工したのは寛永13年で、総工費は2万3,487両と記録されている。平面約10坪の建物だから、仮りに1両を今のお金の2～3万円に相当すると考えると、33.3㎡当たり7,000万円近くかけたことになる。に建築物としては世界にも類のない高価なものといえよう。

回廊

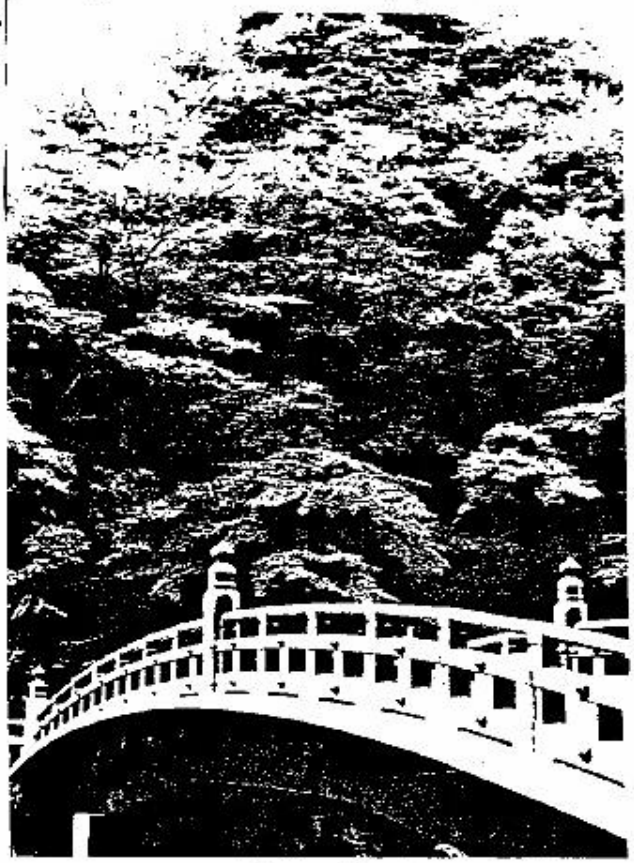
回廊　陽明門を中心に左右にのびて、中央の社殿の東・南・西の3方を囲む形でめぐらされてある。総朱塗りで延長は約160m。陽明門の正面間口の外側には、極彩色を施した鳳凰・孔雀・松竹梅などの大彫刻が柱間をうめつくし、見事なもの。内側の壁面には、寛永17年にオランダ商館から奉納された、12個の燭台がついている。

組物の間の蟇股は計30個あり、各々四季の草花と鳥獣が彫られているが、東側の坂下門前にある蟇股の一つに有名な"眠り猫"の彫刻がある。ボタンの花に眠っている猫という図柄の小さなもので、見落としやすい。左甚五郎の作といわれるが、その確証はまったくない。またこの部分の回廊は、軒に唐破風がつき、東側に格子戸がついて門のようになっているので、"眠り門"とも呼ばれている。

石ノ間

拝殿と本殿をつないでいる石ノ間は、一段低くつくられており、床に石が敷いてあるのでこの名がある。この奥が本殿で、本殿の内部は幣殿・内陣・内々陣に分かれ、内々陣には高御倉と呼ばれる、御神体の東照大権現を安置する宮殿がある。

石ノ間、本殿の柱間や唐戸に施された各種彫絵類には目を見張らせるものがあるが、一般参観者が入れるのは幣殿まで。なお石ノ間・幣殿を見るには共通拝観券のほかに特別拝観料が必要。



神　橋

唐門・透塀

唐門・透塀　澄明門をくぐって正面に見える白い建物が唐門で、その左右から透塀がのびて、本社をぐるりと囲んでいる。

唐門は桁行1間、梁間1間という小さなものだが、屋根は四方軒唐破風造りといって、正面と側面の破風の形が異っていて珍しい。棟の上には正面と背面に唐獅子、左右に龍の銅製彫刻がある。唐獅子はツツガという最も強いといわれる想像上の動物で夜の守神とされ、龍は尾もヒレも切られてあって"ヒレ切りの龍"と呼ばれ、昼の守神とされている。正面左右の柱には昇り龍・降り龍が象嵌され、虹梁と屋根の間の三角形の部分や、四方吉輪上など計8か所に、中国の聖賢をあしらった見事な彫刻が施されてある。

透塀は延長約160mで、正面と背面に唐門、左右に潜戸がある。黒漆塗りの柱を背景にして、中央は緑彩色の蓑束間、腰羽目には水鳥、欄間は山鳥の彫り物になっている。この内側に東照宮の心臓部ともいうべき拝殿・石ノ間・本殿があるわけで、そこへの参観者は東側の潜戸から入るようになっている。

拝殿・本殿

拝殿・石ノ間・本殿　東照宮の中心をなす建物で、本殿と拝殿を石ノ間でつなぐ、上から見るとエの字型の"石の間造り"になっている。寛永13年に建てられた当時は、神社建築としては最も新しい形で、今は東照宮にちなんで一般に"権現造り"と呼ばれている。

拝殿内部の間取りは、中央に63畳敷きの中の間があり、その右に18畳敷きの将軍着座の間、左に同じく18畳敷きの親王着座の間がある。中の間は吹寄せの格天井で、天井板には竜の円文が描かれているが、百間百種分けの竜といわれるように、それぞれに図柄が異っている。狩野探幽・尚信・長信、久隅守景など、当時一流の絵師によるものである。

将軍着座ノ間

将軍着座の間には、将軍の坐る上座を囲んで東側と北側に、ケヤキの一枚板に雪木の寄木象嵌の装飾を施した計4枚の額羽目がある。鳳凰を主題とし、4面とも構図が異なり、バラ・竹・牡丹などを配している。親王着座の間にもこれと同じように4枚あるが、こちらの方は鷲を主題としている。

中の間と左右着座の間を仕切るふすまには、狩野探幽の筆になるキリンに竹と岩、牡丹に唐獅子、バクの絵などが描かれてある。

奥　社　眠り猫の彫刻のある回廊潜門のすぐ奥に白・金を基調とした1間1戸平唐門の坂下門がある。奥社への入口で、かつては将軍の参拝以外には開けられなかったため"開かずの門"とも呼ばれた。今は一般にも開放され、特別参拝という形で一定期間は入れるようになっている。

坂下門を入ると奥社への参道が左に折れ、左下に東照宮本社を見ながら進む。参道の左側に石垣、右側が石柵で、床は一面切り石が敷きつめられてあるので石廊下とも呼ばれる。

ここから三つ折りになった207段の石段を登ったところに、後陽成天皇震筆の「東照大權現」の額をかかげた銅鳥居がある。右手に銅神庫とも呼ばれる御宝蔵。さらに10段の石段を上ったところに黒漆塗りの奥社拝殿がある。拝殿は寛永10年の造営になるもの。

拝殿のうしろには鋳製宝塔がたち、石造りの玉垣がめぐらされている。玉垣の中央正面に鋳抜門と呼ばれる銅製唐門がある。門は全部青銅の鋳物で、大きな鋳型で鋳抜いたものといわれてこの名があるが、実際には柱・屋根・控壁などに分けて鋳造したらしい。

宝塔は家康の遺骸を葬る墳墓の上に建てられていて、ちょうど本殿の真うしろにあたるところ。天和3年(1683)8月の鋳造で、鋳物師は幕府お抱えの椎名伊予吉寛、指物大工頭は鈴木長兵衛、棟梁は鶴飛騨正村と記録されている。宝塔前には、寛永20年(1643)に朝鮮から献上された銅製の香炉・花瓶・燭台がある。

あたりはうっそうと茂る老杉におおわれ、霊域と呼ぶにふさわしい雰囲気。唐門に向かって左手の石柵の外にそびえる、大きな洞穴のある杉が叶杉で、願をこめた杉板のお札がいっぱい並んでいる。

神興社・神楽殿（重文）　陽明門を入った唐門前は、奥行約20m、東西の回廊から回廊までの間が約60mの、横長の広場になっている。唐門に向かって左手奥に神輿舎、右には神楽殿、その北に西面して上社務所が建っている。

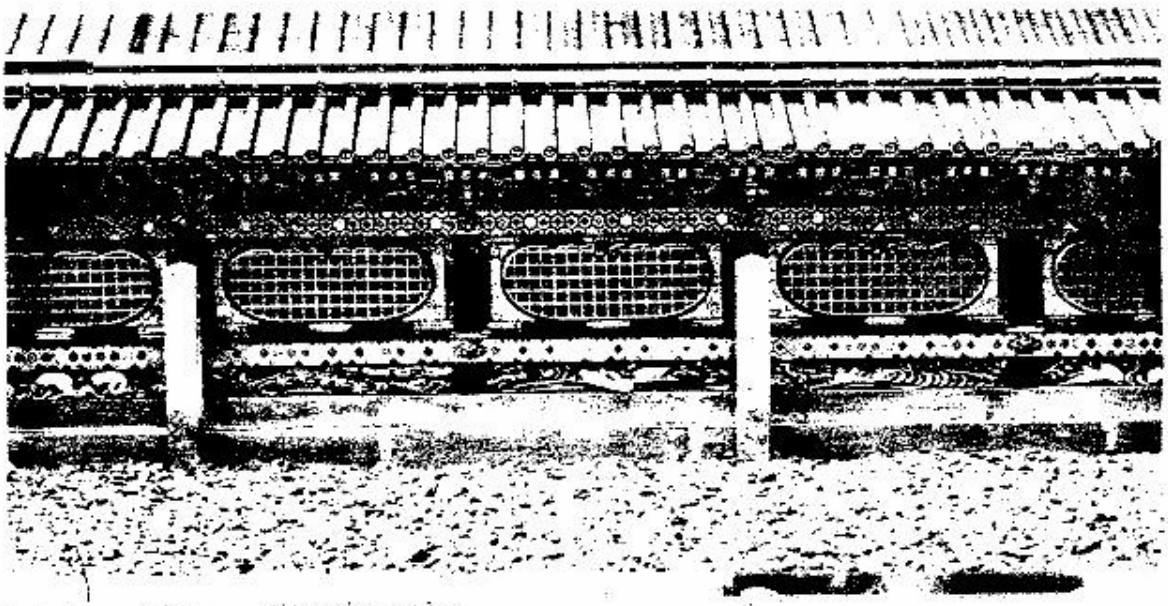
神輿舎には主神の家康のを中央に、左に秀吉、右に頼朝のものの計3基のみこしが収められてある。建物は3間4方の入母屋造りで背後は回廊に密着し、天井には狩野了承筆の天人舞楽図が描かれてある。みこしは千人行列の渋引出され、長坂東側にある御旅所まで渡御する。みこしが出たあと堂内で手をうつと、本地堂の鳴竜と同じような「ピューン」という音がするという。

神楽殿も3間4方の入母屋造りで、楽屋と舞台の二つの部分からなり、建物の正面は本殿の方を向いている。江戸時代には東照宮に奉仕する八乙女がここで神楽を舞ったが、八乙女の舞いは今でも受け継がれている。建物は全体に地味な感じがする。

上社務所はかつての護摩堂で、内部の奥に護摩をたく須弥壇が設けられ、背後の壁には松と梅の壁画が描かれてある。明治の神仏分離後上社務所と名を変え、本尊の五大尊は輪王寺の三仏堂に移されたが、昭和44年中禅寺に五大堂が完成し、そこに収められている。

上社務所と神楽殿の間を東へ入ったつきあたりが、眠り猫の彫刻のある眠り門である。

▼東照宮本社透塀



神　橋

神　橋（重文）　市内安川町。日光駅から中禅寺湖方面行バス約5分、神橋下車。

日光山内の入口、大谷川にかけられたはね橋形式の木橋で、長さは26.42m、幅6m、水面からの高さが約10.6m。橋桁以外には朱漆が塗られている。元来橋脚は用いられない構造のものだが、現在は切り石製の橋脚で補強されてある。また太い橋桁の端を両岸の地中に埋めていることも特色で、この橋桁は"乳の木"と呼ばれて神聖視され、とくに上流の南岸のそれは"神秘乳の木"といわれ、洞の中に橋姫の像が安置されている。

室町時代のころから橋脚の無い橋として知られていたが、東照宮が造替された寛永年間(1624～44)、橋の改修がおこなわれ、このとき従来の形式を一変させ、切り石製の橋脚による補強がおこなわれた。その後何度か修理の手が加えられているが、江戸時代を通じて神橋の造替工事の諸儀式は、山崎太夫によって取り行なわれるしきたりになっていた。山崎太夫は名を沼尾氏といい、橋掛長兵衛とも称され、神人という身分だったが、古くからはね橋の技術を伝える家柄であったらしい。

今の橋は昭和25年から31年までかかって行なわれた解体復原工事によるもの。国の重要文化財に指定されており、山口の錦帯橋、山梨の猿橋とともに日本3奇橋の一つともされる。現在二荒山神社の管理で、一般の通行は禁止されている。

▼勝道上人の墓

御旅所（山王社）

御旅所　神橋から輪王寺三仏堂方面へ登る途中、長坂の東側にある。東照宮春秋の大祭に神輿が渡御するところで、本殿・拝殿・神饌所などが国の指定重要文化財になっている。また本殿に山王権現を祀ってあるので、山王社とも呼ばれる。

寛永13年の造営で、本殿と拝殿との中間に、祭りのとき"東遊"が奉奏される幅5m、長さ6.7mの石舞台が設けられてある。本殿寄りの角には東遊再興の碑があり、鎮座以来奉納されていた東遊が一時途絶えたのを、5代将軍綱吉のとき(1680～1709)再び行なわれるようになったと刻まれている。

深砂大王社・蛇ノ宮

今から約1,200年前、勝道上人が10人の弟子とともに日光を訪れたとき、この場所で大谷川を渡ろうとしたが、急流で渡れないので神仏に祈ると、深砂大王(仏教の水の神様)があらわれて青赤2匹の蛇を川に投げ入れた。すると蛇が橋のようになり、その上に山菅を生やして渡りやすくしてくれたという。この伝説にちなんで「山菅の蛇橋」とか「山菅橋」とも呼ばれ、両岸の橋を見下ろす地点に深砂大王、蛇ノ宮の両社が祀られている。

太郎杉

日光山内への観光客はすぐ下流にかけられた日光橋を渡るわけだが、渡って左に行ったところ、神橋に近くバス道際にそびえる巨杉が"太郎杉"で、樹齢約600年。ここから右手に輪王寺・東照宮表参道にでる長坂が、木立の中を登っている。

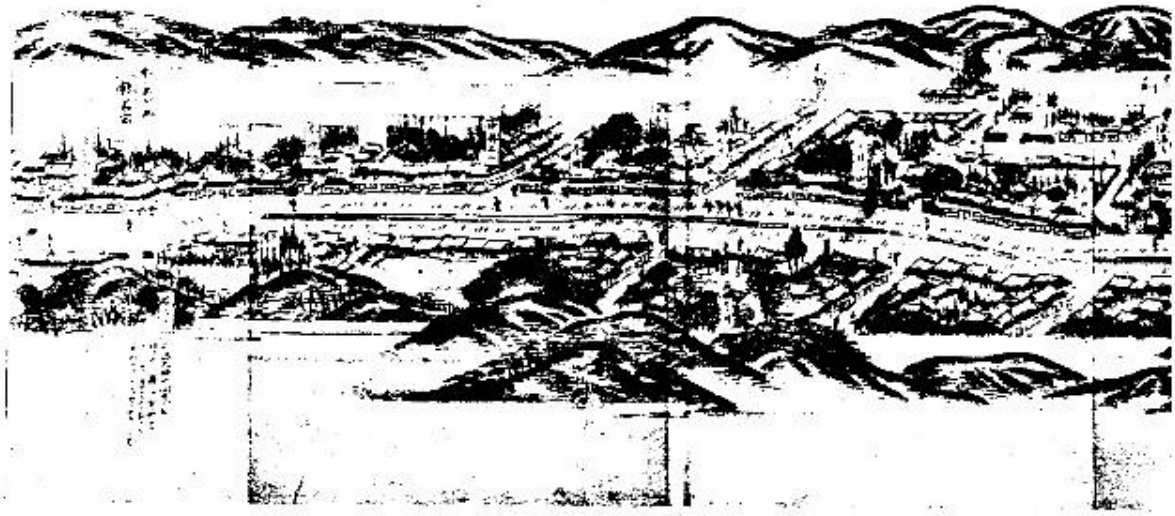
板垣退助の銅像

日光橋際から左に曲らず、北に入れば四本龍寺や二荒山神社の本宮がある。

日光橋の手前左側、金谷ホテルの入口に板垣退助の銅像が日光山内の方を向いてたっている。明治戊辰戦争のとき、官軍の参謀であった板垣退助の賢明な処置により日光は戦火から守られた。これを記念して建てられたもの。

天海僧正の銅像

天海僧正は、家康と親交深く、輪王寺の座主となる家康の遺言に依り、駿府久能山より神柩を日光に移し、家康の霊廟とし東照権現として祀る、天海僧正の進言に依つたと言う。日光の今日の隆昌は天海僧正の功に負う所大であり、これに報いる為に建立す

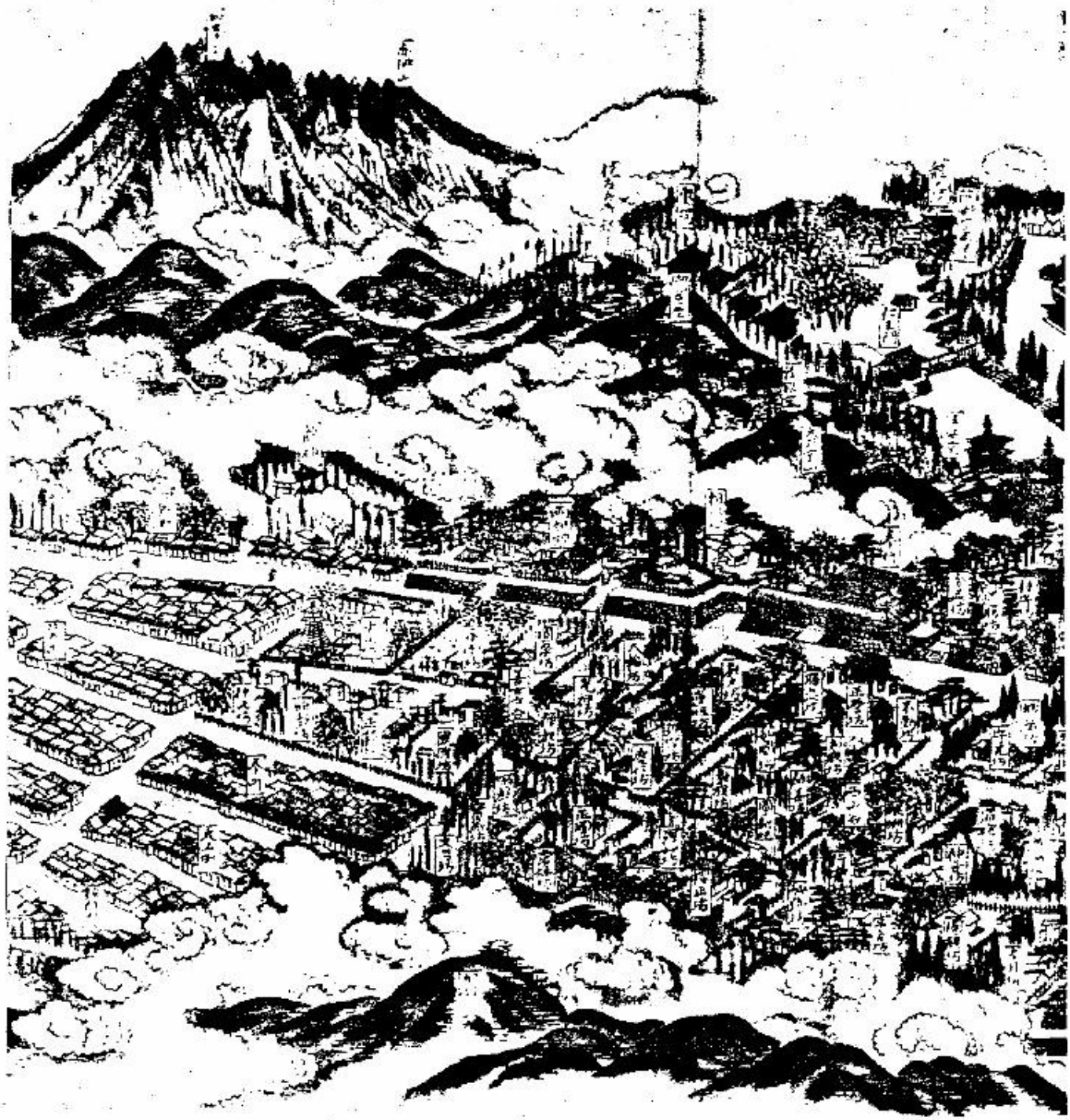


鉢石宿

▼鉢　石　宿

近世の日光山は東照宮鎮座ののち、幕府の庇護によって社寺の殿堂が備わり、宿坊が並び、又、町家は山内から移されて、東西両町を形成した。日光街道終点の宿駅鉢石を出て大谷川に架る仮橋をわたれば、警備の番所があって、これより山内の区域である。

▲ 日 光 山 内



日光山内の図

強飯式

"日光責め"の名で知られる日光山古儀の一つで、大黒天・弁財天・毘沙門天と日光3社権現からお供えものをいただく修験道の儀式である。毎年4月2日に輪王寺の三仏堂でおこなわれる。

山伏姿の4人の強飯僧がかみしも姿の4人の受飯者に、3升入りの木椀に山盛り飯、大杯の酒をいだかせる。そして「1杯2杯にあらず75杯スカズカとのめそう」などと責めながら、赤唐辛子や生大根、たで・山椒を膳の上に手づかみで配り、頂だいを強いる。強受飯者は、江戸時代には大名や位の高い役人がなっていたらしい。これを頂だいした者は、四魔退散・家運長久・七福即生・七難即滅の効験あらたかとされていた。

儀式は午前と午後の2回行なわれ、見学もできる。数多い日光山の行事のなかでも、珍奇さと面白さにかけては、まずこれが筆頭とされている。

和楽踊

毎年8月5・6日に、日光電気精銅所内で行なわれる盆踊り。大正天皇が日光に避暑にこられたとき、精銅所に勤らく人たちが、日光の盆踊りを精銅所向きに改めてお見せしたのが始まりで、以来日光和楽踊として全国的に有名になった。

歌詞は、いかにも精銅所らしく色艶の少ないものだが、囃子のテンポがきびきびしていて気持ちがよい。当夜は、精銅所の中庭はそろいのゆかたを着た2万人近い老若男女でうめつくされる。

〜一目みせたや故郷の親に
　　和楽踊のこの姿
〜踊りは下手でも仕事は上手
　　下手で職工さんがつとまるか

鉢石・鉢石宿

鉢石　市内中鉢石町。

日光駅から国道沿いに神橋へ行く途中、右手の宇都宮信用金庫日光支店の庭にある。

神橋から上・中鉢石町付近にかけての地質は、砂岩・粘板岩などの古生層からなり、その一部を石英斑岩・花崗斑岩が貫いている。そんな岩盤の一部分が、鉢を伏せたような形で地表に出たのがこれ。

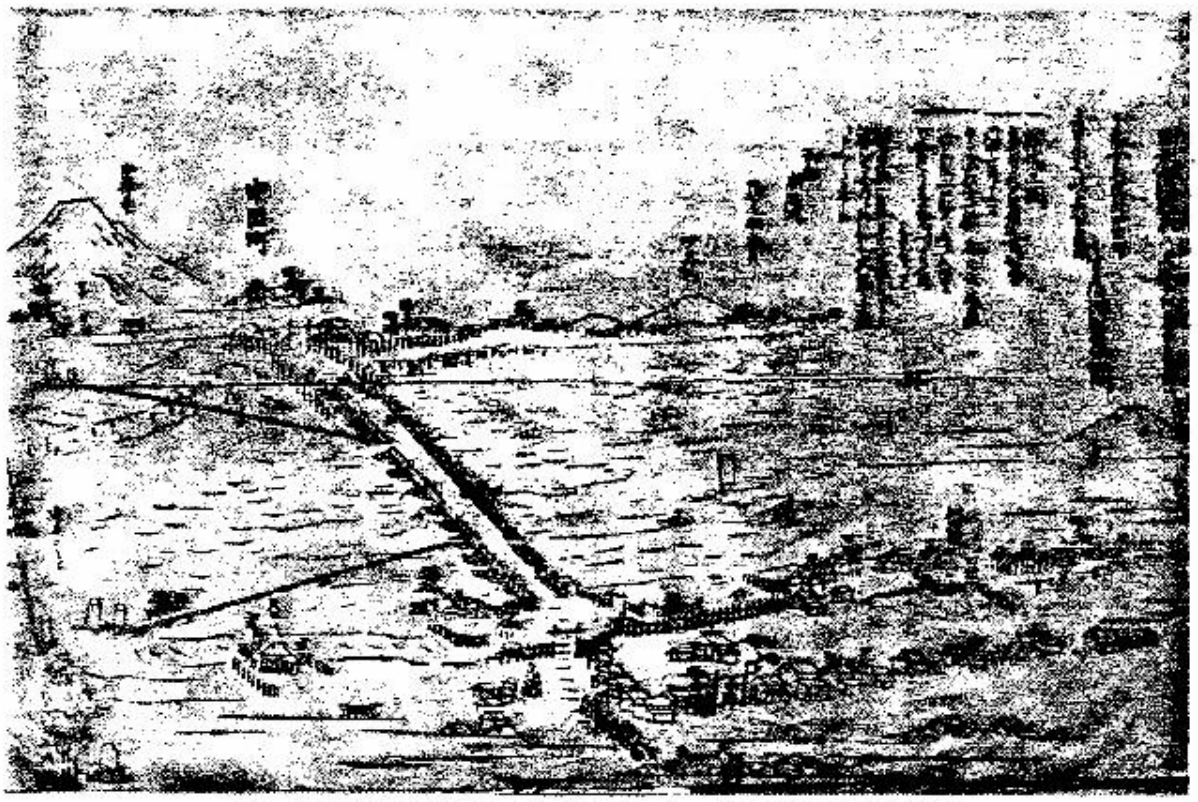
勝道上人が男体山開山のころ、大谷川の南岸に鉢の形をした大きな岩があり、托鉢をおいて日光山を仰ぎながらひと休みしたので、この名がついたという。真偽のほどは分からないが、ほかにも上人の開山の功績にちなんだ石がいくつかあるから、鉢石も法縁にあやかったらしい。市の指定文化財になっている。

今の鉢石町地区は東照宮鎮座の元和3年（1617）ころを契機に、日光道中の最終宿「鉢石宿」として栄えたところ。その宿名もこの石に由来している。

<行軍社参の絵画（日光神橋渡御の景）>

<日光道中行程記安見絵図より>

岩槻宿



<第一図：利根川に架けられた舟橋を画いた一枚刷り版画（筆者蔵）>

房川渡

世良田の東照宮

本書冒頭の"東武鉄道の今昔"において、一寸触れたが、日光の東照宮と東武鉄道伊勢崎線の世良田駅を降りたところにある世良田の東照宮とは深い関係にある。

日光に東照宮を建立し、徳川家康の剣を静岡県の久野山から移したのは二代将軍秀忠で元和二年の時である。これには天海僧正の影響を多とした、それから三代将軍家光の代になって、これでは規模が小さすぎるとかで、もっと大規模な現在に残る日光東照宮を建立した。そのため寛永二一年に旧東照宮を解体し、そっくり移築したのが世良田東照宮である。

この世良田は群馬県新田郡尾島町大字世良田字徳川といった地で、何かと徳川氏とは因縁づけられる。周知のとおり、新田の地は新田義貞の地盤であり、新田義茂の子徳川義季が世良田の長楽寺を義茂の菩提寺と定めた。徳川家の系譜によると徳川・新田・清和源氏とさかのぼることになるが、源氏とのつながりについては歴史家の通説は否定するところである。それはともかく世良田の地が徳川の代になって深く関係づけられたことは確かで、これには長楽寺の天海僧正に負うところ大であったといえる。長楽寺はしたがって当然世良田東照宮の別当寺で、その長楽寺文書は荘園研究の貴重な資料として歴史研究家に知られるところである。ちなみに長楽寺は承久三年（一二二一）に開かれた古寺である。

このような関係で、世良田の地はかつては栄え、お江戸みたけりゃ世良田においで、と歌われ、小江戸ともいわれて、祇園といって夏祭りは立派な山車を出して賑わった。

さてその世良田東照宮だが、日光東照宮よりも規模は小さいとはいえ、そっくり日光から移した旧東照宮であるため、建築物の価値は高く、昭和三一年に国の重要文化財に指定されている。長楽寺と敷地は続き、かつては六万坪あったといわれるが、今は一万坪位であろうか。

昭和三九年から四・年にかけて国費二千万円をかけて修築し新品同様に甦り、紅唐や屋根瓦は美しく輝いている。

とかく忘れられがちな世良田東照宮が同じ東武鉄道線にあることを喚起しておこう。

延年の舞

強飯式と同様に、やはり日光山古儀の一つで、延年長寿を祈願する儀式である。東照宮春季例大祭の5月17日、輪王寺の三仏堂で行なわれる。舞の起源は、平安初期に慈覚大師が中国から伝えたものだといわれている。

当日には、三仏堂の前に敷舞台が設けられ、輪王寺の僧侶の中から2人の舞衆が選ばれる。舞衆は緋のドンスに牡丹唐草模様のひたたれ、それに白ばかまと短刀を身につけ、裏頭と呼ばれる白い袈裟で頭をつつみ、一山僧侶の頌歌にあわせて舞う。舞の途中で、慈覚大師が中国から伝えた秘曲として有名な宿明が行なわれる。

また1月1日の開山祭もよく知られている。勝道上人の坐像を中心に日光駅から三仏堂まで行列が進み、長崎の蛇祭りに似た金竜の舞が、日光の街中でくりひろげられる。

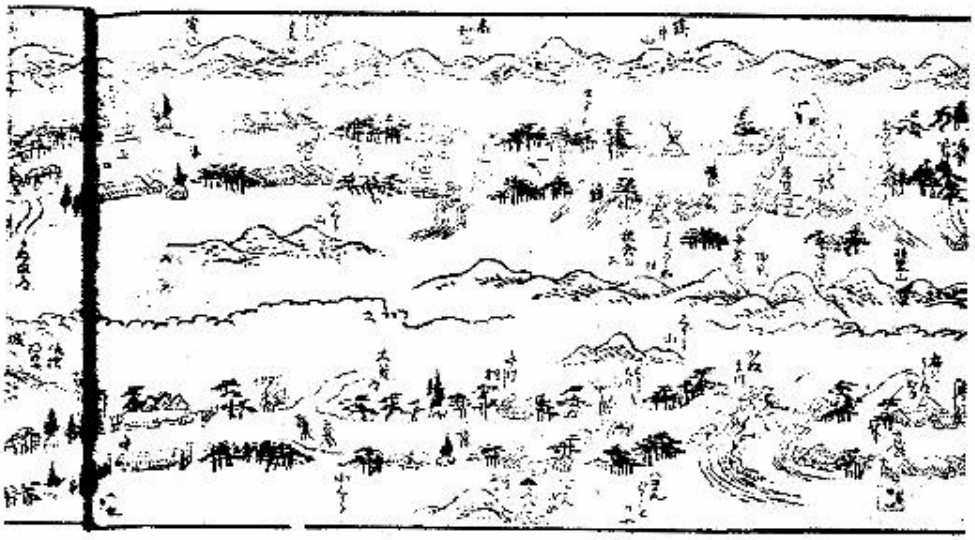
弥生祭

二荒山神社の例大祭で、毎年4月17日におこなわれる。歴史は古く、はじめ6月1日に行なわれて神宮会と称されていたが、弘仁12年（821）に3月に行なう事に改め、三月会または弥生祭と呼ばれるようになったといわれる。明治以降は改暦により、今の日程になった。

当日には日光の15の町からお囃子に合わせて屋台が練り出し、各町ごとに使者を立てて名刺を交換する。夕方になると各屋台は拝殿を一周するが、これを"神明回り"という。一方、本社・滝尾・本宮の3社のみこしは、300余名の行列を連ねて本社から本宮に渡御し、本宮拝殿前で祭典を行ない、本社に遷御する。

日光の街に春を告げる祭りとして知られ、県内外からの数万の人出で雑踏する。

日光道中について



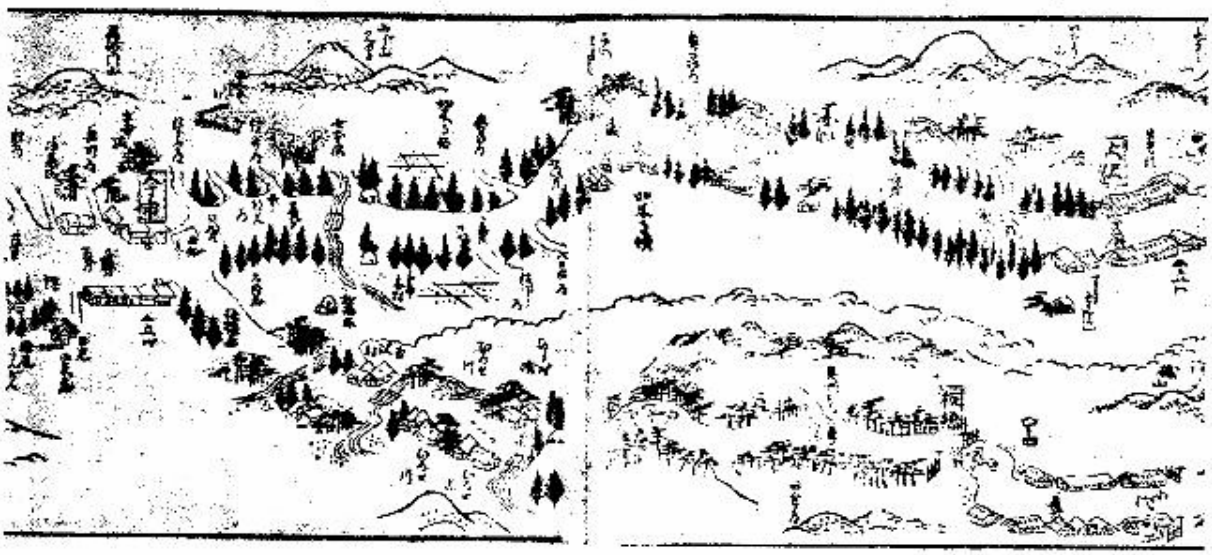
日光社参　徳川家康公が元和二年（一六一六）四月十七日に駿府で薨じ、遺命によって即日久能山に葬られ、翌三年に神柩を日光に移して、四月十六日に鎮座、翌十七日に祭礼が行われ、今日の日光東照宮のもとができたことはよく知られているところである。

その一周忌の直前、元和三年二月二十一日に、朝廷から東照大権現の神号が贈られた。久能山に葬ったときには、神龍院梵舜によって吉田家の宗源神道の式によったが、宗源神道ならば、豊臣秀吉の場合のように大明神号である。しかし、天海は、先に家康に天台の山王一実神道を伝授し、家康も権現たるべきことを遺命したと称して、金地院崇伝や梵舜の反対をおしきり、結局その意見が採用されて、大権現号が贈られることとなったのである。

さらに越えて正保三年（一六四五）十一月三日に宮号の宣下があって、以来東照宮と称することになった。こうして、全国の支配者となった徳川氏の最も崇敬する神社が生まれ、家康公を東照神君とも、単に神君とも称するようになった。

東照宮に対しては、日光遷座のあった元和三年四月の一周忌に二代将軍秀忠が参詣したのをはじめ、将軍の参拝がしばしば行われ、四月の大祭に将軍が参詣できないときには、大名や高家を名代として派遣するのが例であった。将軍の参詣は、社参とも日光登山ともいった。（国字分類雑記）には、はじめは社参といったが、宮号宣下の後は参宮というべきであるが、それでは伊勢参宮とまぎらわしいので、参詣ということになった、としている。しかし後に至るまで、社参とも参宮ともいっているので、一定した表現をしたわけではない。

将軍の社参は、二代秀忠が将軍時代に三回、大御所になってから一回、三代家光は、世子時代に一回、将軍になってから九回ある。家光がきわ立って多いのは、その時代に東照宮の大造営が行われたことも関係があろうが、家光の家康公に対す



<日光道中図（嘉永三年版日光道中行程記安見絵図より）>

る追慕の念が深かったことが主な原因であろう。また当時の幕府財政は、そのたびたびの社参にも応じられるほどの余裕があったのである。四代家綱は、世子時代に一度、将軍になって一回の社参をしている。

五代綱吉は、まだ館林城主であった時代に、寛文三年（一六六三）に、兄の家綱が社参したあとに、甲府城主であった次兄の綱重と相前後して社参しただけで、将軍になってからは一度も参詣しなかった。すでに幕府財政が破綻に瀕していて、往復の費用の支弁ができなかったためという。綱吉はそれを聞いて、将軍にも一日の倹約ができないかと言って、大に悲嘆したので、貨幣改鋳によって益金を出そうとし、それが元禄金銀改鋳のきっかけになったといわれるほどである。

六代家宣、七代家継は、その治世期間も短く、かつ将軍が病弱または幼少であり、日光社参は計画もされなかった。八代吉宗になり、家綱の社参から八十年目の享保十三年（一七二八）に社参があったが、これ一回きりであった。九代家重時代の寛延三年（一七五〇）の家光の百回忌、十代家治時代の明和二年（一七六五）の家康の百五十回忌の法会には、将軍の参詣はなく、名代ですませている。しかし家治は安永五年（一七七六）に社参を果している。十一代家斉は治世が五十年に及び、大御所時代と称される華美な生活を送ったにもかかわらず、社参の計画をしただけで、ついに実行しなかった。そして十二代家慶が天保十四年（一八四三）年に社参をしたのが最後になっている。世子、大御所時代を含めて十九回、綱吉の城主時代を加えると、将軍となった人の参詣は二十回ということになる。

御成道　将軍が社参のときには、通常の日光道中を通らないで、一部は御成道と呼ばれる道を通行した。元和三年に、秀忠が初めて参詣したときには、四月十二日に江戸を出発し、千住で大川（隅田川）の橋を渡り、草加を経て、越谷から高力忠房の岩槻の岩槻に行き、ここで一泊した。この日は数日来の暴風雨で、千住の橋も流されそうな水勢で、騎馬で渡って水に流された者もあり、風雨にむせて死亡した者もあったほどである。雨のために栗橋が落ちたので、秀忠は岩槻に、日滞留し、十四日に古河城（城主は土井利勝）に泊り、十五日に宇都宮城（城主は奥平忠昌）に泊り、十六日に日光に到着している。

将軍が日光社参のときに、岩槻、古河、宇都宮に宿泊することは、この後の例となり、秀忠が元和五年十月に日光に参詣したときにも、往復とも三城に泊している。ただし、次ぎの元和八年四月の社参のときには、帰路にも宇都宮城（城主本多正純）に宿泊する予定であったのを、急に変更して壬生城に泊り、翌日には岩槻に泊って江戸に帰っている。これは将軍夫人が病気のために急行したというのであるが、本多正純が宇都宮城において将軍に危害を加えようとしたことが洩れたためという説が生じ、宇都宮釣天井事件といわれ

る。真偽はともかく、正統は間もなく改易に処せられるのである。

寛永五年（一六二八）に大御所秀忠につづいて三代将軍家光が参詣したときには、往路は岩槻・壬生・宇都宮に宿泊している。翌六年には家光も岩槻・古河・宇都宮にとまっているが、同九年の家康の十七回忌のときには、岩槻・古河・宇都宮にそれぞれ一泊して今市に達し、爽涼のために参拝しないで、今市の旅館にとどまり、奉幣だけをしている。

こうして細部には異同があるものの、岩槻・古河・宇都宮を通るのが将軍の参詣道となった。これら三城および壬生城には譜代大名を置いたのも、一つにはこうした条件があったからであろう。

また、江戸から岩槻に行く道としては、千住を通らないで、岩槻・川口・鳩ヶ谷・大門の四宿を経て岩槻に達し、次ぎの幸手宿で日光道中に合する道が用いられるようになり、この間を日光御成道と称することになった。これは鎌倉時代の鎌倉街道に相当するといわれる。将軍の宿泊地としては城郭が必要であって、それが岩槻を通過させることになったのである。なお江戸と日光の間は三十六里余であったが、将軍も三泊四日で通過しているのは、一日に九里（三五キロ余）前後を行くわけで、かなり強行軍であったことがわかる。また岩槻と川口河宿の間は七町にすぎなかったから、通常は合宿形式で、半月交代で勤めて、継ぎ立てはしなかったが、将軍の社参のときには継ぎ立てをした。

日光道中　将軍が社参のときには、岩槻に泊るため、御成道を通るが、一般には、江戸を出ると、千住に至り、草加・越ヶ谷・粕壁を経て幸手宿で御成道と合し、栗橋・中田・古河・野木・間々田・小山・新田・小金井・石橋・雀宮・宇都宮・ここまでは奥州道中と一体であるが、奥州道中は北方へ向い、氏家・喜連川・太田原などを経て白川に行く。

もともとは、宇都宮までにしても奥州街道で、かつて源頼朝が陸奥平泉の藤原氏を討つために北上したときにもこの道を通り、古多橋（宇都宮）に一泊し、宇都宮（いま二荒山神社）に奉幣をして戦勝を祈り、帰途にも奉幣して報賽し、一か所の庄園を寄進しているのである。それが東照宮が造営され、将軍家をはじめ大名・公卿などの往来がしきりに行われるようになると、日光社参のための街道の意味が強くなって、奥州道中は宇都宮から先と考えるようになった。しかし、江戸・宇都宮間は日光道中と奥州道中とが重なっていたと考えるほうが適当であろう。

日光道中は宇都宮から西北に向い、下徳次郎・中徳次郎・上徳次郎・大沢・今市・鉄石を経て日光坊中に達する。江戸から坊中まで三十六里十一町余である。宿としては二十三宿あるが、下・中・上の徳次郎宿は三宿が十八町（二キロ）ほどの間にあって、河前村、田中村、西根村と一体で徳次郎六郷と称していた所である。そして継ぎ立て業務も、三宿の間歩で十日ずつ勤めていたから、機能としては一宿である。ほかに栗橋と中田の両宿は合宿で、毎月、上の十五日は栗橋で、下の十五日は中田で継ぎ立てをしたから、これも機能としては一宿である。そこで栗橋・中田を一宿、三徳次郎を一宿として数えれば二十宿ということになる。宿の間が他街道よりも短かい。

日光道中の宿は、慶長以前から存在した集落を中心にして設定されたものであるが、後になって宿に加えられたものもある。

確実に街道と宿とが定まったのは寛永年代であろう。寛永十三年には、伊勢神宮の二十年ごとに遷宮する例にならって東照宮の大造営があって、ほぼ今日の社頭の姿が現出し、爾来日光参詣がいよいよ盛んになり、道路や休泊の施設も整備されたのである。

人馬の施設　五街道を初め、主要な街道には人馬の用意があって、公用の旅行者はそれを利用できたが、一日に一宿で提供する数には制限があって、東海道では百人・百疋、中山道では五十人、五十疋、日光道中や甲州道中では二十五人、二十五疋であった。ただ宇都宮は人足五百人、馬百疋まで継ぎ立てていたが、天保九年（一八三八）からは二十五人・二十五疋に減少している。

これを使用できるのは、幕府から使用を許可された幕府の用務で旅行する大名・旗本などや、別格の公卿などであるが、いずれも一日に使用で

きる数は限定されていた。公用旅行者はその限られた数までは無賃であったが、それを越えた分は公定賃銭（御定賃銭）を払った。参勤交代の大名は、東海道では一日に五十人・五十疋まで、他の街道では一日に二十五人・二十五疋まで公定賃銭で使うことができたが、大名の石高によってその日数に違いがあった。日光道中では二十万石以上は大名通行の当日と前後二日ずつ、計五日間は二十五人・二十五疋まで。ただし仙台の伊達氏は文政七年（一八二四）から当日と前後一日ずつ、計三日は五十人・五十疋を使えることになったが、文政十二年になって、さらに当日は七十五人・七十五疋、前々日と前日は五十人・五十疋を使えることになった。また十万石以上は、当日と前後一日ずつの三日間二十五人・二十五疋、五万石以上は当日と前後のいずれか一日の計二日間二十五人・五十疋を使え、以下は当日のみであった。

さて日光道中を通る参勤交代の大名は、文政四年現在で、仙台の伊達（六二万石）、会津の松平（二三）、秋田の佐竹（二〇）、盛岡の南部（二〇）、米沢の上杉（一五）、藩岡の酒井（一四）、白川の松平（一一）、二本松の丹羽（一〇）、弘前の津軽（一〇）の諸氏など四十一名に達している。

参勤交代の大名が、その現定以上の人馬を必要とするときには、相対賃銭で雇う必要があった。相対賃銭は公定賃銭のほぼ二倍か一倍半ぐらいが通例になっていた。また大名の家臣が通行するときには、日光道中では十三人・十三疋までは公定賃銭で使うことができた。仙台の伊達氏の家臣のように、万石以上の者がいるとこれでは不足するが、ふつうの武士は公定賃銭で旅行ができたことになる。

各宿の問屋で扱う人馬には、無賃・公定賃銭・相対賃銭の三種類があるが、無賃と公定賃銭の人馬とは、宿で義務として提供しなければならないもので、相対賃銭の人馬は依頼に応じて提供しているものといえる。江戸を出発する大名たちは、出発前に、日本橋の伝馬役所に、自分の旅行日程と、必要人馬数とを提示する。伝馬役所では、先々の宿場にその日程表と人馬数とを書いた先触を出して、通知をしておく。日程表には、宿泊地・昼休地・小休地（宿泊の休息地）が書いてあるから、宿ではそれに応じた人馬を用意し、休泊の準備をする。人馬数が宿の人馬で不足ならば、助郷という近隣の村々から集めておく。これらの負担は過重で、それに堪えかねた農民が一揆をおこしたこともある。

ふつうの旅行者は、宿や助郷の人馬を使うことはできないから、宿場で客待ちをしている馬士や駕籠かきに交渉して、適当な値段をきめて馬や駕籠を利用したのである。

宿場には宿泊のための本陣・脇本陣・旅籠屋、休息のための茶屋があり、大名は本陣か脇本陣に休泊することになっているが、随行している家臣は下宿と称して、一般の旅籠屋を利用した。日光参詣や参勤交代の大名・其本で、日光道中の宿場は旅館も多く、商業も盛んであった。

日光道中早歩き　江戸から鉢石まで三十六里三町二十間、鉢石から坊中まで八町、これが日光道中の全行程である。江戸の日本橋を出ると、二里八町で最初の宿が千住である。ここは千住五ケ町といい、掃部宿・橋戸町・河原町・小塚原町・中村町が一体となって千住宿を形成していた。水戸佐倉道の分岐点でもあり、品川・新宿・板橋とともに、江戸の出口の宿場であったから、通常の宿場と異なって、食売女（飯盛女）も多くいて、遊興街でもあった。天保十四年（一八四三）の人口は九、九五六人、家数は二、三七〇軒であって、日光道中では最も戸口が多く、繁華な町であった。日光道中から江戸へ来る大名は、この宿で小休して、衣服を改め、行例を整えて府内に入った。また奥羽に旅立とうとする人も、ここまで送ってきた家族や知人と別れの盃をくみかわして、わらじを踏みしめて出かけるのであった。

芭蕉の「奥の細道」でも、深川を出た芭蕉と曾良とは隅田川を渡って、千住で舟から上り、見送りの人々に離別の涙を流して、行脚の第一歩を踏み出している。宿内の小塚原には幕府の刑場があり、杉田玄白らが刑死者の「腑分け」を行ったところでもあり、安政の大獄に多くの志士が斬られた場所でもある。現在南千住駅前の回向院に、それらの人々の墓がある。

千住には荒川にかかる大橋があり、長さ六十六

間（一二〇メートル）の板橋である。荒川は少し下で綾瀬川と合流して隅田川となる。千住から二里八丁で草加宿になる。ここも九ケ村が組合になって宿場を形成しているもので、戸数が七二三、人口が三、六一九、旅籠屋も六七軒あって、かなりの繁華さで、五の日と十の日とには市が立った。次ぎの越ケ谷宿まで一里二十八町。越ケ谷も家数一、〇〇五、人口四、六〇三、旅籠屋五二、本陣一、脇本陣四があり、商業の盛んな町で、二の日と七の日と、月に六日の市が立った。

越ケ谷の次ぎが粕壁、芭蕉は第一夜をここで泊ったが、ここは江戸から九里二町、千住からでは七里弱、数え年で四十六歳とはいえ、浴衣から筆墨、あるいは餞別の品までを痩せた肩にかけた芭蕉の旅は楽ではなかったようである。ここでは四の日と九の日とに市が立った。これから一里二十一町で杉戸宿。ここは五と十の日に市が立つ。次ぎの幸手までは一里二十五町。古い奥州街道は杉戸宿の外れから西の裏道を幸手へ通っていた。幸手宿でも二の日、七の日には市が立った。

幸手から二里三町で栗橋宿。ここから利根川を渡るが、ここでは房川という。その川端に関所があって、中田関所といった。川幅は二百十四間（三九〇メートル）、船渡しである。もっとも将軍が日光社参のときには、船を並べてその上に板を渡して船橋をかける。それをつなぎとめる鎖は、鎖蔵に収納してあった。川を渡れば下総国となり、中田の宿であるが、ここは栗橋と合宿で、家数は六九、戸口は四〇三人の小さな宿場であった。中田から一里二十町で古河。ここは城下町で、奥平・堀田・松平・土井など、徳川氏譜代の代名がいて、多くの大老・老中を出した者があった。ここからは館林や佐野へ行く道も分岐していて、館林道には渡良瀬川があり、渡船があるほか、川を上下する高瀬船・茶船・伝馬船なども多かった。

古河から二十五町二十間で野木、さらに一里二十七町で間々田宿、その中間に乙女村があり、思川に臨んで乙女河岸であった。日光の東照宮を初め諸堂社の普請や将軍の社参・法会などのときに、材木や諸物資を江戸から船で輸送し、ここで陸あげして、車馬に積み替えて陸路を運送した。乙女河岸から江戸まで川路三十六里、間々田へ陸路十八町である。

間々田から一里二十三町で小山。ここは関が原の役のときに家康が軍を返した所であるから、家康の御陣跡といわれがあった。ここから一里十一町で新田宿、さらに二十五町で小金井宿、さらに一里半で石橋宿になる。芭蕉は粕壁の次ぎの日には間々田に泊り、小山と新田の中間の喜沢で日光道中を離れて壬生道に入り、鹿沼で一泊し、翌日日光の鉢石に着いている。

石橋から一里二十三町で雀宮、さらに二里一町で宇都宮に至る。ここは城下町で、奥羽に備える要地であったから、奥平・本多・戸田などの譜代大名が置かれていた。天保十四年には、家数二、二一九、人口六、四五七人、本陣二、脇本陣一、旅籠屋四二を数えた。ここは奥州道中への分岐点である。

宇都宮から二里余で徳次郎宿、さらに二里ほどで大沢宿になる。ここは家数四三、人口二七八人という小さな宿であるが、本陣一、脇本陣一、旅籠屋四一で、みな旅宿業を営んでいたことになる。次ぎが二里で今市宿、ここは会津街道の分岐点でもあり、壬生道の合流点でもある。有名な杉並木は、ここから日光道中・壬生道・会津街道の三方面へ分れて立ち並ぶのである。

今市から二里で鉢石、ここは宿場とすれば鉢石宿、地方につけば鉢石村、日光惣町へ加えれば鉢石町という。いまの日光市の中心部でもある。ここから坊中（山内）へ八町。鉢石の名産には、墨石・岩茸・川海苔・平繋麺・清蕎麦・こぎの実などがある。また鉢石宿外の御幸町の入江宮兵衛の家は、本陣と東照宮の御菓子屋とを兼ねていて、家伝の蕊菓子や鉄和餅などを東照宮へ献備するのに御用を命ぜられた。御幸町というのは、もと新町といって、山内にいたものが、寛永十八年（一六四一）に引き移ったもので、祭礼が渡御するので御幸町と改めた。芭蕉は元禄二年（一六八九）の四月朔日に鹿沼を立つて、東照宮に参拝し、その夜は鉢石町の仏五左衛門と呼ばれる正直者の家に泊ったのである。これも途中に三泊である。

メモ欄

参考資料

今市市立歴史資料館	刊行物
郷土資料事典	人文社
栃木県の歴史散歩	山川出版社
大日光	日光市

日時　昭和五十七年九月二十七日

主催　越谷市郷土研究会

案内者　理事　山崎善司